

# 山東京伝『化物和本草』考―陳列される化物―

影山 日好梨

## はじめに

草双紙は、営利出版が大きく展開した江戸時代において、庶民の娯楽として享受されてきた。その中でも、安永四（一七七五）年から形を成す黄表紙は、子供だけではなく、大人の読者を楽しませる複雑な仕掛けが施されるものとして長きにわたり親しまれてきた。

黄表紙創作の第一人者として名高い山東京伝（一七六一―一八一六）は、たびたび滑稽諧謔な作品を世に送り出したが、寛政三（一七九一）年に刊行した洒落本三作が禁令に触れ、手鎖五十日の刑に処された事件以降は、その作風が理屈におちた教訓的なものになっているという小池藤五郎の見解が現在通説となっている<sup>1</sup>。これは京伝に限らず、多くの戯作者の作品の傾向としていえることであり、恋川春町のように戯作から身を引く者も少なくなかった。

さて、本稿で主題とする『化物和本草』（一七九八）は「化

物尽くし<sup>2</sup>」という趣向を凝らした作品であるが、前述の説に従うと、『化物和本草』の発行は寛政三年以降に該当することから、教訓臭の強い作品であることが予想される。しかし、そもそも黄表紙に扱われる「化物」は滑稽の文脈にあり、教訓とは相反する趣向であることから、『化物和本草』の注釈的な読み解きと、京伝作品における意義について、再検討する必要性が感じられる。

本論では、これらの問題を踏まえ、『化物和本草』を取り巻く時流を追いながら、京伝の創作活動における当作品の位置付けについて明らかにすることを目的とする。

## 一 本草学における化物への理解

まず、化物がどのような認識のもと描かれてきたのかについて確認していこう。古典における化物の描かれ方として馴染み深い「百鬼夜行」に、その変化がよく見られる。

「百鬼夜行」と言えば、異類異形の化物たちが真夜中に群れをなして徘徊する怪異のことだが、複数の化物の集まりを描いたものであるから、「化物尽くし」の嚆矢ともいえよう。その「百鬼夜行」の古い実例として引かれる『今昔物語集』巻十四の四十二『依尊勝陀羅尼駛力遁鬼難語』は平安時代の成立とされる。「百鬼夜行」を題材とした『百鬼夜行絵巻』は室町時代から明治・大正年間まで描かれ続けてきたが、田中貴子は平安時代の百鬼夜行と、室町時代に描かれたそれとを様子と同一視することを批判している。室町時代に見られる百鬼夜行には付喪神と呼ばれるモノが化けたものが出てくるのに対し、平安時代では個々の化物の特徴を見てとれる記述が一切ないという指摘である。さらに香川雅信は、『今昔物語集』と『宇治拾遺物語』の表現を例に補足する。

「……」大方やうやうさまざまなる者ども、赤き色には青き物を着、黒き色には赤き物を着、禪にかき、大方目ひとつある者あり。口無き者など、大方いかにも言ふべきにあらぬ者ども<sup>4</sup> 「……」(巻第一第三話「鬼に瘤取らるゝ事」)

近くて見れば、目一つ附きたるなどさまざまなり。人にもあらず、あさましきものどもなり。或は角生ひたり。頭もえも言はず恐ろしげなるものどもなり<sup>5</sup>。  
(巻第一第十七話「修行者、百鬼夜行に逢ふ事」)

この二つの例文に共通して見られる特徴として、鬼たちの形象が「さまざまなり」、つまり多種多様であること、また、「いかにも言ふべきにあらぬ」「えも言わず」といったように異形のさまが言語化できないことを指摘している<sup>6</sup>。平安時代における「百鬼夜行」は、「百鬼夜行」という集合体それ一つがあるのみで、そこに存在する一つ一つの化物たちが分節化されることのない、無秩序の塊を表していたのである。

ところが、安永五(一七七六)年刊行の鳥山石燕『画図百鬼夜行』は、この無秩序な集合体を解体し、それらを個別に命名した。自跋にて「もろこしに山海経、五朝に元信の百鬼夜行あれば、予これに学てつたなくも紙筆を汚す<sup>7</sup>」とあることから分かるように、本書は古代中国の地理誌『山海経』<sup>8</sup>と狩野元信の『百鬼夜行絵巻』を参考にして作成された。『画図百鬼夜行』における化物の掲載方法は画期的で、『山海経』の化物を名前と図像によって一つずつ紹介するという博物学的様式を採用した。これに

よって、群れとして描かれる「百鬼夜行」が秩序化し、個物の化物たちが認知されるようになったと考えられよう。『画図百鬼夜行』の化物たちが「怖くない」ことは先行研究によって指摘されているが、それは徹底的な化物の情報化に起因するとみてよい。後述するが、化物に名前が付され個別に掲載されるという様式自体は、既に『画図百鬼夜行』刊行時点で存在している。しかし、化物を主軸に扱い、化物のみを扱う作品として登場した『画図百鬼夜行』は、読者に十分な化物像を与えることはもちろん、その図像を定着させることに寄与した作品だといえよう。

さて、筆者が論の中心に据え置く『化物和本草』は、その表題から、貝原益軒の宝永六（一七〇九）年刊『大和本草』を踏まえたものであることは明らかである。『大和本草』の種になったのは、中国明代に成された李時珍『本草綱目』（二五九六）で、本書は江戸時代初期から貴重な本草学書として輸入された。この『本草綱目』を踏まえて成された『大和本草』は、日本の産物を対象としており、益軒の経験に立脚した記述が心掛けられた上で、薬物としての有用・無用性に拘らず幅広い自然物を掲載しているところに最大の特徴の特徴が認められる。言うなれば、本草学を博物学と呼びうるものに発展させた一書であった。

多くの研究者が日本近世の化物観を研究するにあたっ

て、本草学と化物との関わりに触れているが、木場貴俊は『本草綱目』、『大和本草』、そして正徳二（一七一二）年成立の寺島良安『和漢三才図会』に見られる化物を例に挙げ、化物が妖獣として紹介されながらも、生類としての理解を得ていたことを指摘している。『大和本草』でも「人魚」「河童」「鵝（鵞）」といった化物の掲載が確認でき、「河童」の欄を見ると「処々大河ニアリ又池中ニアリ五六歳ノ小兒ノ如ク<sup>10</sup>」というように、その生息地、容貌が紹介されている。これを種本とした『化物和本草』においても、「獅子身中の虫」を例に見ると、「頭は釣灯籠の如く、羽は蜘蛛の巣の如く、尻尾は文の如し。常に縁の下に住居をなし、蛸魚を餌食となし、その声、由良殿由良殿と鳴く<sup>11</sup>」という記述が認められる。また、「溝から蛇」では「毎年六月朔日、富士祭の後、諸所の溝の中より現る、蛇なり。眼は真鍮の鋏の如く、舌と尻尾の剣とは梅漬の如く赤し。総身は黄金色に光る。足はなけれども、よく何にても巻付く<sup>12</sup>」と紹介されている。どちらも生息地、容貌、その他の生態について記載されており、すなわち、化物も他の掲載された生物と同様に、生物として理解されていることが分かる。恐ろしさという性質を持った化物の生態を、あくまで本草学（博物学）の視点からとらえ、情報化しているのである。

以上から、それまで混沌とした得体のしれないものであった化物は、中国の地理書などを参考にしながら刊行された『画図百鬼夜行』により、一個の生命体として広く認識されることになった。この掲載様式は化物尽くしの趣向の分類の一つとしてアダム・カバットにより「化物図鑑<sup>13</sup>」と名付けられたが、『化物和本草』が本草書の書式を踏襲し、化物を掲載することを可能にしたのは、化物を未知のものから既知の存在にした化物認識の転換が強く影響する。本草書において化物は、特定の生態系を持つ生命体として描くものだったのである。

## 二 見世物興行と化物

『化物和本草』の背景となる本草学・博物学を読み解く前提知識として、エレキテルで人口に膾炙する平賀源内の活動に触れておかねばならない。源内は主に十七世紀中葉における蘭学の勃興・興隆期に活躍する人物で、戯作者、画家、俳人、発明家、そして本草学者としても活動していた<sup>14</sup>。日本初の薬品会・物産会の出品解説書として評価される『物類品隲』（一七六三）は、総数二千を超える展示された出品物の中から厳選した三六〇品の解説を載せ、そのうち特に珍しい三十二品目については写生図を掲載したものである。周到な観察に基づく視覚的側面からの位置付

けがなされており、江戸時代の博物図譜として代表されるものとなった。

ところで、薬品会は本草学の勉強会として開かれた催しであり、知的な情報交換の場として当初は新規の薬品や医療器具などを持ち寄って展示していたようだ。ところが、この薬品会は次第に珍しい自然産物や器物などを陳列する博物展覧会の様相に変化していくことになる。天明五（一七八五）年に大坂で行われた、本草学者・木村兼葭堂<sup>けんかどう</sup>の秘藏品一〇八点を公開する「唐の開帳」という催しは、薬品会というより、あからさまに見世物興行に近いものとして挙げられる行事であった。出品物として人魚の骨や比翼鳥があり、香川雅信は薬品会・物産会や本来宗教行事であった開帳などにおいても「視覚的快楽の場」へと変容したと指摘している<sup>15</sup>。つまり、十八世紀後半以降の薬品会・物産会は、町人らにとつては珍しいもの・変わったものを見ることのできる娯楽の場であったといえる。こうした博物学的思考は、嗜好として広く受け入れられていくこととなった。なお、この薬品会・物産会、または開帳・見世物を常設化させたようなかたちで珍奇なものを見せることを売りにしたものを珍物茶屋という<sup>16</sup>。

ここで『化物和本草』に話題を移すと、京伝が序文に「画図は珍物茶屋の招牌に似たり。」<sup>17</sup>と筆するように、

「温鈍げの花」や「両頭の筆」のような、化物というよりは珍物を紹介する素振りの記述がたびたび見られる。確かに「獅子身中の虫」や「平気蟹」では題目の化物に対して「恐ろしや」<sup>18</sup>「恐れ慎むべき蟹」<sup>19</sup>というように恐怖の対象とした化物も認められなくもないが、一方、「温鈍げの花」では「珍しい花でござる」<sup>20</sup>、「両頭の筆」では「これは不思議なこと」<sup>21</sup>といった記述があるように、珍奇に思えど、恐怖を覚えた様子はない。「化物和本草」十四丁裏から十五丁表にかけて掲載されている「山の神の角」「三足の猫足」「頭の黒い鼠」に至っては、安永六（一七七七年）に両国で人気を博した「とんだ靈宝」という見世物の体裁を模したものと見て間違いない。「とんだ靈宝」は三尊仏・不動明王・鬼などを乾魚や乾大根で作り、当時流行であった寺社開帳に陳列したありがたい靈宝を見立てている「とんでもない靈宝」の見世物のことであり<sup>22</sup>、もつともらしく講談師が説明を加えるという体裁が特徴である。

加えて安永七（一七七八年八月）に豊後国府内藩浜之市にて、「両頭の筆」、「三足の猫足」の下敷きになったと思われる両頭の蛇、三本足の猫の見世物があったことが確認できる<sup>23</sup>。八戸市博物館に所蔵される八戸藩九代藩主南部信順収集の本草学標本コレクションの中には「双頭の人魚のミイラ」が収められているが、一つしかないはずの首が



図1 「とんだ靈宝」の見世物。もつともらしく解説を加える（天明四年〔一七八四〕刊『嗟鳴御開帳』、若松万歳門作。国立国会図書館蔵、国立国会図書館デジタルコレクションより転載）。





図2 講釈師が解説を加えているのが分かる。御開帳同様、三つの見世物が展示される。寛政十年〔一七九八〕刊『化物和本草』。早稲田大学図書館蔵。古典籍総合データベースより転載）。

二つある、または四本なくてはならない足が三本しかないといった生物の身体における異形は、見世物興行の定番の題材だったのだと考えられよう。なお、この「双頭の人魚」は完全な作り物であり、下半身は鯉などの魚の胴体を利用し、上半身は木や針金などで成形されたものである<sup>24</sup>。「双頭の人魚」を作る細工職人が存在したことも確認されており、観客は創作された化物ということを分かった上で見物に来ていたと思われる。換言すれば、伝説上の生物が実際に見られるという好奇心はあるものの、それが本物であるか作り物であるかは、見物客たちにとってさして重要な問題ではなかったことである。両頭の蛇や三本足の猫が作り物の見世物であったか否かは分からないが、それを明らかにすること自体、江戸時代の見世物の楽しみ方としては野暮な話なのかもしれない。

さて、寛政十三（一八〇一）年に確認できる京伝黄表紙『こはめづらしいみせものがたり這奇の見勢物語』の題目は、平安中期に成立されたとされる『伊勢物語』と「見世物」の地口である。本文は「昔男ありけり」から始まり、その関連性を覗かせている。しかし、そこに掲載される見世物は項毎に区切られており、半丁、または一丁にかけて各項毎に独立した物語が展開するオムニバス形式をとっている。

本作の十二丁裏から十三丁表にかけて記された「鬼娘の

見世物」という項は、「鬼娘」という見世物に材をとった。この見世物は、安永七（一七七八）年に両国回向院での信濃善光寺阿弥陀如来の出開帳に合わせて行われたものが嚆矢だとされている。鬼娘は、鬼の相貌をし、頭に袋角と呼ばれる瘤を持った女性で、舞台の上でかぶっていた打ち掛けを取り、素顔を晒すといっただけの見世物であったが、当時大変な評判になり、数々の黄表紙に題材が使われてきたようだ<sup>25</sup>。昔話に聞く鬼が実際に見られるという観客の好奇心をおおった見世物だったが、あまりの流行に贗作も多く出回ったようで、顛末には迫力のある、人々の想像に近い、もしくは上回るものが人気を呼び、元祖鬼娘を圧倒してしまったという。とにかく、鬼娘は創作化物のほうが生かすという見世物、めざましい展開を呼んだ創作化物の一つといえるだろう。

『這奇の見勢物語』の「鬼娘」をみてみると、挿絵に描かれるのは両手を角に見立てて頭に立てた女性であり、袋角もなければ顔も他の黄表紙に描かれる鬼娘のようなものでもない。「昔から、鬼となり、蛇となるは皆女なり<sup>26</sup>」と、鬼や蛇になるのは人間の女だと書かれており、この作品における鬼娘が、本来のものと性質を違えていることが読者に伝わる。『化物和本草』にも「山の神の角」として怪気嫉妬で生える妻の角を紹介しているものが同題材とし

て認められる。ここで見世物になっているのは怒り狂う妻であり、本物の鬼娘よりも怒った人間の女性の方が恐ろしい、という趣向が読者の笑いを誘うところである。この趣向は十八世紀を目前に控え、伊原西鶴が『西鶴諸国ばなし』（一六八五）に「人はばけもの。世にないものはなし」と記したことが思い起こされるが、こうした人間中心の怪異観への転換は、人と化物の境界を曖昧にしたといえる<sup>27</sup>。空想の存在であった化物が、現実味を帯び、より人間に近いものとして扱われていくのである。見世物として展示される化物は、この近世の化物観の中で、怪異、恐怖とは全く別の、好奇といった感情のもと展開されていたのではなからうか。

見世物興行における出品物は、それ単体が珍物として観客や読者の興味を惹くものであったため、一つの物語として長編にするには相性が悪く、それぞれを個別に収集し、各枠組みの中で紹介していくのが主流であった。また、そもそも見世物は集客せねば商売にならない。もちろん「怖い物みたさ」という人々の心情を利用した見世物もあるが、真に恐れおのくようなものが見世物であっては商売が成り立たないはずである。江戸に興隆した見世物興行において、化物は、娯楽を提供し、そのために創作される存在として、人々に受容されていくようになったと考えられる。

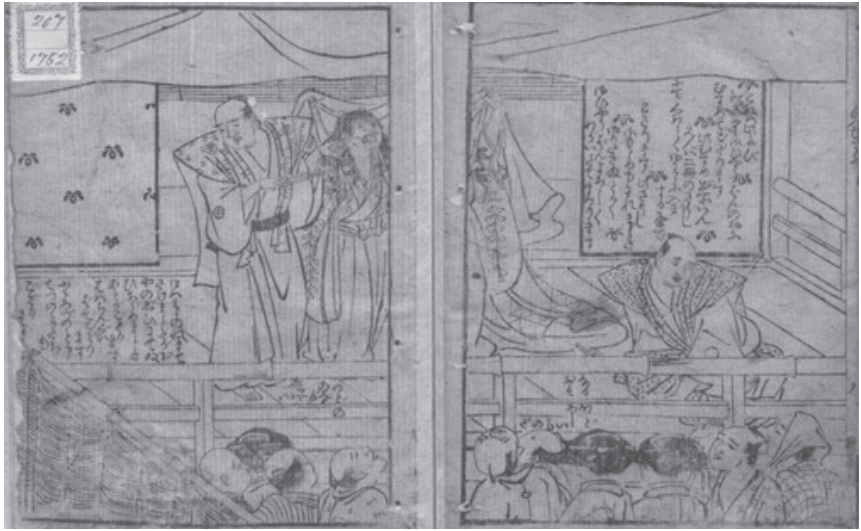


図3 頭頂部には二つの袋角があり、形相は人間と異なる。場面は鬼娘が見世物にされている様子（安永七年〔一七七八〕刊『鬼の趣向草』。国立国会図書館蔵。国立国会図書館デジタルコレクションより転載）。



図4 立腹する女性と、それを恐れて逃げる男性が描かれる（寛政十三年刊山東京伝『這奇の見勢物語』。国立国会図書館蔵。国立国会図書館デジタルコレクションより転載）。



### 三 「見立絵本」文化の脈流

ここまで江戸時代における化物認識と、本草学、本草学を基に娯楽として発展した見世物興行について、『化物和本草』に含まれた要素を分解してきたが、「見立て」についても触れねばなるまい。

「見立て」とは、よく知られた題材にまったくの別物をあてはめ、それによって生じる意味のずれや多重化を楽しむ知的な遊びである。この「見立て」を主題とした絵本が「見立絵本」と呼ばれる。宝暦五（一七五五）年に刊行された『見立百化鳥』（漕川小舟画作）がその水端となるのだが、これは日用素材の組み合わせで「あふ木（扇）」、「あせ鳥（汗取り）」のような「木」と「鳥」の見立てを考案し、その絵に準じた説明を附すというものである<sup>28</sup>。『見立百化鳥』刊行以降、この種の「見立絵本」が文芸における滑稽性、戯作性の太い水脈となったことは、中野三敏の指摘するところである<sup>29</sup>。『化物和本草』と同年に刊行された『百化帖準擬本草』<sup>ひゃくかちようみてほんぞう</sup>は一丁、または半丁にそれぞれの丁の右端を線で区切って項目を立て、「枕瓜に胡てふ（胡蝶）」<sup>30</sup>、「笹りんどうに平家蟹」のように植物と動物（の見立て）の組み合わせで作品が構成されている。序文には

「百化鳥ハはや五十年の昔となりぬ」と記されており、『見立百化鳥』の趣向を取り入れたことは明らかである。さらに「是には草樹鳥虫その実名を翻案し」と続き、『見立百化鳥』を踏襲しつつも、その対象を木と鳥から広げ、「草樹鳥虫」の翻案を行う意趣であるという断りを入れている点を見ると、『化物和本草』の種本となった『大和本草』にも見られる幅広い自然物の掲載という特徴を踏まえていると理解できよう。

ここで、京伝が化物尽くしの趣向を取り入れた黄表紙三作品を比較してみたい。すなわち、寛政四（一七九二）年刊の『化物徒然草』、本論の主軸である寛政十年刊『化物和本草』、そして享和三（一八〇三）年の『怪談摸摸夢字彙』である。

『化物徒然草』と『化物和本草』の共通点として、第一に序文が挙げられる。巻冊数に関する記述に注目すると、『化物徒然草』では「帖之は二巻。開之は十枚」、『化物和本草』では「これをた、めば二巻となり。これをひらけば十枚あつて<sup>31</sup>」と、どちらも共通した要素の言葉が見られる。『化物徒然草』は確かに二巻十丁なのだが、『化物和本草』は三巻十五丁で構成されているため、この記述はつじつまが合わない。この表現は『化物徒然草』の序文の焼き直しだと認められる。また、『化物和本草』の跋文において「徒

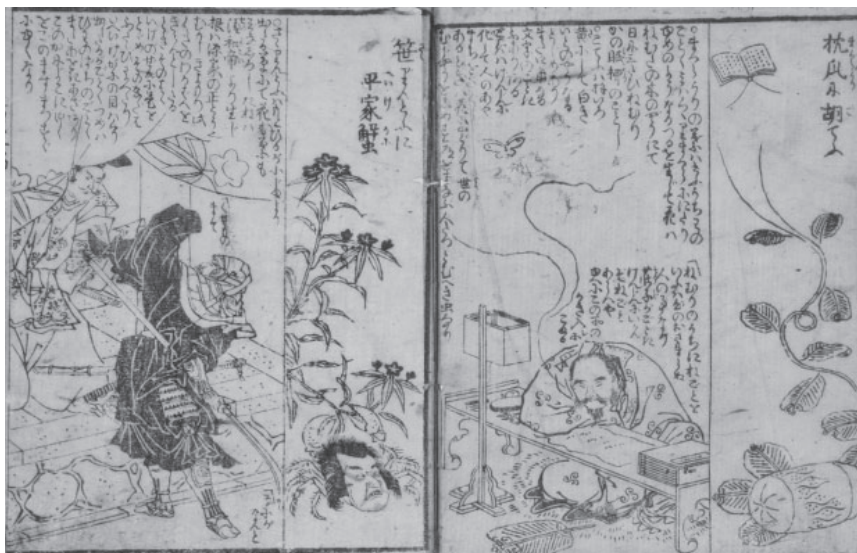


図5 左、「笹りんどぶに平家蟹」。右、「枕瓜に胡てふ」（寛政十年刊『百化帖準擬本草』（早稲田大学図書館蔵。古典籍総合データベースより転載）。

然なるまゝ、に日暮し文机に向かひ、挿子木に羽の生へたる」で始まる一文は兼好法師『徒然草』の序文冒頭を引いたもので、「怪しきを見て怪しまざれば、怪しきことなしといへる古語」は『徒然草』二〇六段の「怪しみを見て怪しまざる時は怪しみに却りて破る」を踏まえているものと見られる。このように、『大和本草』を種本とした『化物和本草』において『化物徒然草』、またはその素材である『徒然草』を思わせる文章が確認できることを勘案すると、『化物和本草』は『化物徒然草』との連続性を意識していると考えよう。

化物に焦点を当ててみると、『化物徒然草』では見越入道や狐狸、産女など既成の化物たちが主軸となり、題目に即した随筆の体裁をとっている。趣向は安永七（二七七）年に版行された鳥居清長画『化物箱根先』になぞられたもので、畏怖の対象から乖離した滑稽な化物像という約束事が守られている。それに対し、『化物和本草』ではどの化物をとっても化物見立てでしかなく、化物そのものの固有性を保持したものは見受けられないことは重要である<sup>32</sup>。言い換えれば、化物のように見立てることというそのものが『化物和本草』の趣向であり、決して化物そのものに眼差しを向けたものではないのである。

先述した『怪談摸夢字彙』も、『化物和本草』と同様

の趣向を取った化物見立ての作品といえるが、同時に『百鬼夜行絵巻』の見立て<sup>33</sup>でもあるため、化物をさらに日用品や文字遊びと絡めて創作化物に見立てている。裕福でありながら吝嗇な人を見越入道に見立てた「見越入湯」や、漢字の「山」と「水」を草書体で続け書きにして天狗の横顔のように書いて見立てる「山水天狗」がその好例である。対して『化物和本草』は文学作品の見立てが数多く見られ、『仮名手本忠臣蔵』（獅子身中の虫）や『平家物語』（平気蟹）、『伽羅先代萩』（四四真鍮の鼠）などが挙げられる。このように違いは見られるものの、化物たちの登場の仕方に着目すると、どちらも一丁、又は半丁毎に区切られた空間に項目を立て、一つの化物が掲載されるという体裁をとっているが、既述したように、これは本草学、博物学の書式や記載方法の踏襲といえる。

以上より、『化物和本草』の序文に従うと、一見京伝が『化物徒然草』と同趣向の化物尽くし物としてこれを刊行したように思われるが、比較するとこの二作品では性質が全く異なり、むしろ享和三（一八〇三）年に刊行された『怪談摸摸夢字彙』に『化物和本草』と同じ趣向が見いだせることが分かる。

本節冒頭に紹介した『百化帖準擬本草』に話を戻し、本書と『化物和本草』とが同年に刊行されたこと、さらにど

ちらも「見立て」本であり、加えて表題に「本草」という言葉を含むことの二点に着目したい。商品としての側面から黄表紙を考えると、続き物、揃い組ならびに亜流の作品が出版されるのは、続き物の前作またはパロディーの題材とした作品の知名度や趣向の人気によって、読者の購買意欲を掻き立てられることが期待されるからである。『化物和本草』が、その趣向の違いとは裏腹に『化物徒然草』の続編であるかのような記述が確認できたり、『怪談摸摸夢字彙』の内容が『化物和本草』の亜流といえる作品となっていたりすることからも、『百化帖準擬本草』と『化物和本草』の同時刊行は、書肆による一種のセット販売の技術だったと想定できよう。当時の知識人たちは、中国の本草書『本草綱目』、あるいはその和刻版や『大和本草』を目にしており、「本草」という言葉を聞けばこれらの本草書を想起したであろうから、題目は大変興味を惹かせるものであったと思われる。

#### 四 笑いと創作化物

アダム・カバットは、黄表紙における化物は滑稽、笑いを示すものとして記号化していたことを確認した上で、「笑いは重視しないものの、黄表紙から始まる趣向」として「化物図鑑」と「怪談集」を挙げている<sup>34</sup>。「化物図鑑」は、

化物の特徴を手短に紹介したものと定義し、黄表紙の中では『<sup>怪談</sup>怪談評判記』、『<sup>百鬼</sup>百鬼化物語』、『天怪着到牒』、『武家物奇談』の四作のみを該当作品としている。「怪談集」は主にその典拠を百物語の怪異小説に示しており、安永五（一七七六）年刊行の『御伽百物語』など、十二点の黄表紙を「怪談集」に分類している。アダム・カバットの示した定義に従うと、『化物和本草』はいずれの趣向にも該当せず、本書に掲載された十九種の創作化物は笑いを誘う存在として認めてよい。それでは『化物和本草』に登場する創作化物の中からいくつか取り上げてみよう。

『化物和本草』二丁裏から三丁表にかけて紹介される「平気蟹」は、源氏との争いに敗れた平家が入水する際に怨念で姿を蟹に変えたと伝えられる平家蟹伝説に取材したものである。二丁裏の中央に大きく描かれた女の顔をした蟹が印象的だが、文中には遊女を指し示す表現が多く得られる。例えば、「山の崩るれるやうな<sup>ママ</sup>ことありても」の「山」は、挿絵との関連を見ると、おそらく勝山鬻という髪型を指す。この勝山鬻という髪型は江戸吉原の遊女・勝山が始めた結び方と言われ、遊女や歌舞伎から流行し、一般社会に浸透していったようである<sup>35</sup>。安永へ天明、寛政に入るまで、勝山鬻・灯籠鬻と呼ばれる髪型が遊女たちの主流であったようだが、挿絵の平気蟹の髪型はこれに酷似してお

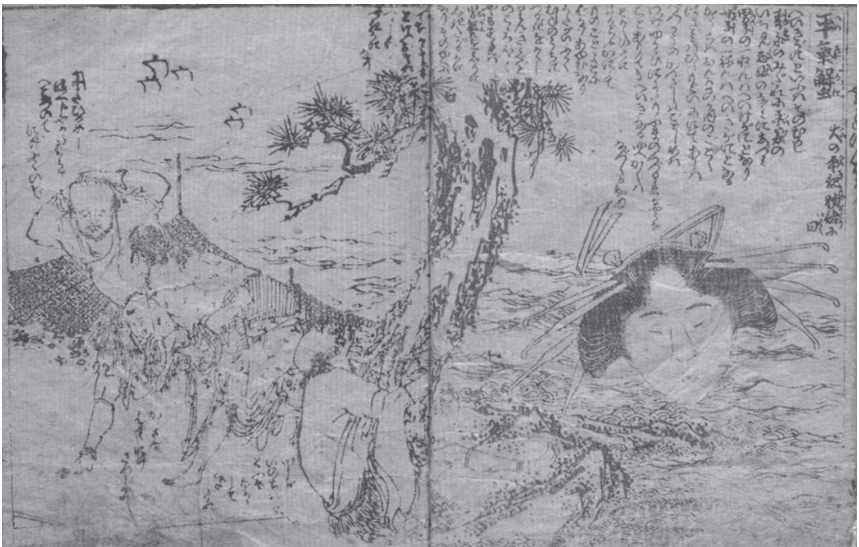


図6 『化物和本草』「平気蟹」項(国立国会図書館蔵。国立国会図書館デジタルコレクションより転載)。

り、横に長く飛び出た簪が蟹の足に見立てられていると見られる。

平家の一門が源氏に敗れ、多くが海に身を投げた壇ノ浦の戦があったのは寿永四年三月のことであり、本文中に見られる「寿永の乱れ」とはこれを指す。『続未曾有記』「壇ノ浦」の項によれば、「こゝに遊女有事は、「平家入水の後、死を通れ婦人女子、身命をつなぐよすがに容色を売て世を渡りし遣風也」といひ伝ふ<sup>36</sup>」との記述が確認でき、壇ノ浦の戦に敗れた後の平家の女性は遊女として身売りして生き繋いでいたと伝えられていたことが分かる。「平気蟹」の下敷きとなった平家蟹の見立てに遊女が選ばれたのは、平家の女性に遊女を連想させる言い伝えが残っていたからであろう。

さて、「平家」の地口となる「平気」とは、単純に意味をあてれば「心に動揺がないこと」「落ち着いていること」だが、ここでは決してよい意味では用いられていないように思われる。「物事横にばかり歩むなり」に使われる「横」の意味を考えてみると、「縦」の対義語としての意味とは別に、「横着」「横柄」「横槍」「横行」など、好ましくない印象を持つ熟語に多く用いられる「横」に意味を取り、蟹の横歩きする様と多重して遊女の悪印象を記したものと考えられる。したがって「平気」にも神経が図太い、横柄

だという要素が包含されているに違いない。「どうぞ蟹に（堪忍）してくだされ」と「平気蟹」を怖がる親子の様子が描かれているが、内容としては横着で怪気嫉妬に囚われやすい遊女を取り上げて茶化しているだけで、人から忌み嫌われはすれども、恐怖とはおおよそ離れたものである。

『化物和本草』四丁裏から五丁表にかけて描かれる「溝から蛇」は、稲につく虫を除く呪術的な行事の「虫送り」に使用された「藁蛇」の見立てである。「六月初日」「富士祭」が「溝から蛇」の出没時期、場所と解説されるが、京伝は寛政二年刊『小紋雅話』にも同様の材を描いており、「六月初日こまごみあさくさよりいづる」との説明が付されている<sup>37</sup>。『守貞謄稿』「五月晦日・六月一日」の項には、「江戸浅草・駒込・高田・深川・目黒・四ツ谷・茅場町・下野したや〔谷〕小野照（以上八所、ともに江戸の地名なり。並に富士山を模造して、浅間の神を祭れり〔…〕等、富士詣でと号して群参す。各所、必ず麦藁製の蛇形を生杉枝に纏ひたるを売るに、大小あるとも皆同制なり」と記され、これらの時期・場所が一致する。寛政九（一七九七）年刊の『絵本吾妻挾』（北尾重政作）には富士詣の様子を描かれており、この当時恒例行事として行われていたことが分かる。この挿絵の中央で子どもが持っているのが藁蛇であり、その特徴が「溝から蛇」に取材されていることは明らかである。



言葉遊びの面から考えれば、名前のものになった諺の「溝から蛇」は、思いがけないところから意外なものが出てく  
 ることを喩えていったものである。富士詣が終わり、必要  
 がなくなった藁蛇が道中のあちらこちらに捨てられていた  
 様子を散見した京伝は、皮肉を込めて「溝から蛇」として  
 描いたと考えられる。作中の挿絵の小僧と女中は「逃げら  
 れぬ」「のう怖や」と化物を恐れているのだが、地の文に  
 は「怖くもなんともしなき蛇なり」と断言している。挿絵の  
 中の人が化物を怖がる、という構図は十九種中六種の化物  
 の紹介で見られるが、全て見立ての元を紐解いていくと、  
 人の言動に起因するものと分かる<sup>39</sup>。

化物は怖いものだ、という前提が消えるわけではないが、  
 『化物和本草』に収録される創作化物の中には読者に怖さ  
 を植え付けるようなものが一切登場しない。怖くない化物  
 たちを怖がる挿絵の中の人々の様子は笑いに導く一つの要  
 素だといえる。

また、化物としての特性に疑問が持たれる創作化物も収  
 録されている<sup>40</sup>。その一つが「金のなる木」である。これ  
 は多くの草双紙に用いられた題材で、心学や儒学との関わ  
 りが強い。挿絵には、聴講する人々を相手に、講釈師が「金  
 のなる木」を見せながら教えを説いている様子が描かれて  
 いる。「奴のひぼし」も、奴胤を、人が干からびて日干し



図7 『小紋雅話』「江戸錦」に描かれる藁蛇（早稲田大学図書館蔵。古典籍総合データベースより転載）。

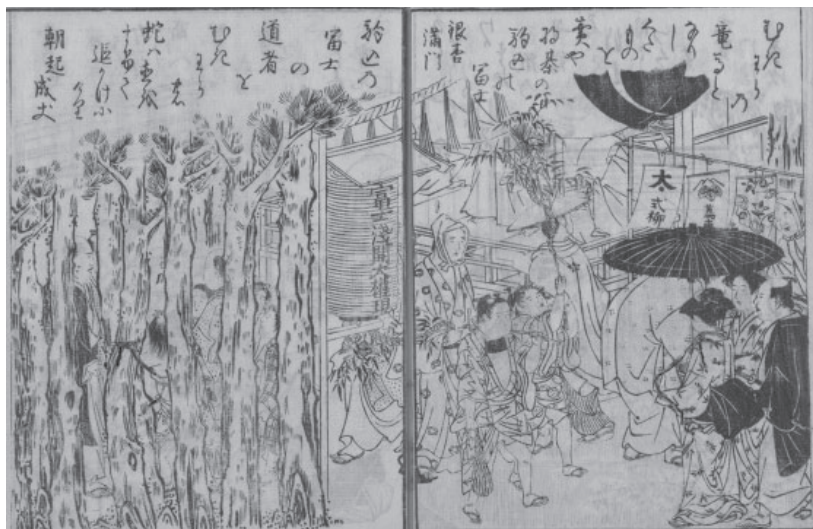


図8 富士詣の様子を描いた場面。右側中央の子どもが持っているのは「虫送り」に用いる藁蛇である（寛政九年刊『絵本吾妻袂』、北尾重政作。国立国会図書館蔵。国立国会図書館デジタルコレクションより転載）。

になったかのように見立てたものだが、どちらも化物自身が人間に働きかけて悪さをするようなことはない（動かないのだからできない）。つまり、これらは見世物興行に展示される珍物としての扱いに偏ったものである。土農工商各々の家業を具現化した形で挿絵に登場し、挿絵の通り教えを説く意味合いが強く表れたものであるが、「金のなる木」を展示した講釈と、それを聞きにくる人々の絵図は滑稽性を覗わせる。

『化物和本草』跋文に目を移すと、化物は「皆わが心の迷い」だと記され、「心の化物を退治すべく、合点か〈と締め括られる。つまり、恐れるべきは人間の心が作り出す感情、言動であり、化物は気の迷いや悪の心から生じるものだということである。これは黄表紙が興隆した当時の代表的な化物観であった。「野暮と化物は箱根の先」のほかにも流行した言葉として「下戸と化物はない（世の中に化物がないように、まったく酒の飲めない人間はいないの意）」があり、俳文集『鶉衣』（一七八七—一七八八）に「化物の正体見たり枯れ尾花<sup>41</sup>」と詠まれるなど、化物は笑いの記号という役割とは別に、「ないもの」の代表でもあったのである。「ないもの」は、人の手や、想像力、思い込みによって認知されるものとなる。

いくつか例外は散見できるものの、基本的に『化物和本

草』は黄表紙における化物の持つ要素として、笑い、滑稽という約束を踏まえているといつてよい。寛政の改革による手鎖五十日の処罰を受けた京伝は、自省の後、教訓的要素を描くことを強く意識していたが、その後一切の滑稽性を黄表紙から捨てることはなかったのである。一見「金のなる木」のような化物は寛政の改革に目指された学問奨励を意識したもののように思われるが、営利を求める学問と、それに夢中になる世情の構図には、皮肉が込められている。このように注釈的分析をしてみると、京伝が主眼に置いたのは化物ではなく、あくまで滑稽性を導く見立ての要素としてこれを利用したに過ぎないことが分かる。

## 五 化物に向く視線

『化物和本草』に収録される創作化物を眺めてみると、共通点として、人間がともに描かれていることに気付く。そしてその全ての項で、人間の視線の先には常に化物がいるのである。『画図百鬼夜行』も化物を収録した「化物尽くし」の書物という点では『化物和本草』と共通するが、人間は一切描かれない。この点で、『化物和本草』と、その書式や構成の種本となった『大和本草』とは明らかに異なる。人間の目線の先に見立ての対象があるという『化物和本草』と同じ趣向で成されたのが、寛政十三年刊『這奇

的見勢物語』である。

『化物和本草』には見世物興行を基盤に様々な見立てが施された化物が収録されているが、この『這奇の見勢物語』も、「物語」と言いながら項目立てされ、どの項から読んでも楽しめるようになっていた。『化物和本草』がパロディーとはいえ本草書を名乗りながらも、化物たちにこれといった分類が示されていないのは、見世物興行の特性に寄った部分だからなのではなかるうか。とはいえ、本草学の薬品会・物産会から発展したものが見世物興行であるから、本草書のパロディーとしてやはり意趣を逸れることはないと言える。見世物は見られることが前提であり、見る主体、すなわち人間の存在は欠かせない要素だったといえよう。つまり、観客がいることではじめて化物という存在が成立するのである。さらには、書中に登場する化物を見ている人間たちや見世物を見ている見物客たちを、『化物和本草』や『這奇の見勢物語』の読者たちが見ている、という二重構造の遊びが施されている。跋文に描かれているのは化物退治に有名な豪傑・坂田金平であるが、金平についても、黄表紙の時代においては、それ以前の「豪傑」としてのイメージから「人間の代表」程度に変わっていったことが指摘されている<sup>42</sup>。つまり、黄表紙の化物世界に読者が自らを投影する手段として金平が活躍するようになって



図9 化物退治で有名な豪傑・坂田金平（『化物和本草』跋文。国立国会図書館蔵。国立国会図書館デジタルコレクションより転載）。

たということである。『化物和本草』の跋文に描かれる金平は、化物の後の最後を飾る「人間の見世物」として読者の方を向いて展示される。この金平の視線の先にいるのは言わずもがな『化物和本草』の読者であるから、実は読者こそが見世物になっているという見方もできる。『化物和本草』の題目は『大和本草』を基に「見世物」と「化物」をかけたものでもあるかもしれない。

#### おわりに

見てきたように、『化物和本草』における京伝の創作化物は「滑稽」「笑い」の記号として扱われており、著名の文学作品に登場する人物や人の言動などを化物に見立て、見世物興行に見立てて茶化す趣向をとっているものが多い。もちろん、寛政の改革による学問奨励の意向を汲んでいる傾向も散見できるが一貫して滑稽性が打ち捨てられたものは見られなかった。『化物和本草』の創作にあたって京伝が主眼に置いたのは「見立絵本」の趣向であって、「化物尽くし」は滑稽性を授ける手段として狙いをつけたものである。

寛政三年の処罰をきっかけとして、京伝の黄表紙が滑稽諧謔なものから理屈におちた教訓的なものに変わった、との評価は大枠では違わないと言えるが、『化物和本草』に

において、黄表紙や、黄表紙における化物が持っていた滑稽性が失われたわけではない。むしろ、当時の出版事情を踏まえた制約の中で、教訓色の強いものに見せかけつつ、積極的に笑いの要素を仕掛けようと試みるものであった。

注

- 1 小池藤五郎『山東京伝の研究』（岩波書店、一九五三年）、六九頁。
- 2 アダム・カバット『江戸化物の研究―草双紙に描かれた創作化物の誕生と展開』（岩波書店、二〇一七年）他。「化物尽くし」の定義は以下の通り。
  - ①化物を主軸においた作品であること。
  - ②題目に化物、又は妖怪といった言葉が採用されていること。
  - ③既存の化物（見越入道、狐狸等）が複数登場すること。
- 3 田中貴子『百鬼夜行の見える都市』（新曜社、一九九四年）、一九一―二二三頁。
- 4 佐佐木信綱他監修・野村八良校註『日本古典全書四四 宇治拾遺物語 上』（朝日新聞社、一九四九年）、五〇頁。
- 5 前掲『日本古典全書四四 宇治拾遺物語 上』、七〇頁。
- 6 香川雅信『江戸の妖怪革命』（角川ソフィア文庫、二〇一三年）、一三四―一三五頁。
- 7 稲田篤信・田中直日編『画図百鬼夜行』（国書刊行会、一九九二年）、九二―九三頁。
- 8 竹田晃・梶村永・高芝麻子・山崎藍『穆天子伝・漢武故事・神異経・山海経他』（明治書院、二〇〇七年）、五二頁。地理書の体裁をとり、川の水源や山と山の間の距離を記録する一方、そこに生息する不思議な人間や鳥獣の情報や神々に関する情報を収めており、特に清代以降は地理学や博物学的な研究、神話や古代伝説の研究の貴重な資料とされた。
- 9 木場貴俊『怪異をつくる「日本近世怪異文化史」』（文学通信、二〇二〇年）、一〇〇―一二四頁。
- 10 貝原益軒『大和本草』巻之十六、二〇丁裏―二二丁表。
- 11 山東京伝全集編集委員会編『山東京伝全集第四巻 黄表紙四』（へりかん社、一九九二年）、一三四頁。
- 12 前掲『山東京伝全集第四巻 黄表紙四』、一三七頁。
- 13 前掲『江戸化物の研究―草双紙に描かれた創作化物の誕生と展開』、一五一頁。
- 14 石上敏『平賀源内の文芸史的位置…戯作者としての評価・評判』（北溟社、二〇〇〇年）、二頁。
- 15 前掲川添裕『江戸の妖怪革命』、一四八頁。
- 16 前掲川添裕『江戸の妖怪革命』、一四八―一五〇頁。
- 17 『山東京伝全集第四巻 黄表紙四』、一三三頁。
- 18 同書、一三四頁。
- 19 同書、一三五頁。
- 20 同書、一三九頁。
- 21 同書、二四七頁。
- 22 前掲川添裕『江戸の見世物』、八三頁。
- 23 神田由築『近世の芸能興行と地域社会』（東京大学出版会、



- 一九九九年)一一一、一一五頁。
- 24 小松和彦編著『妖怪学の基礎知識』(角川選書、二〇二一年)、二〇〇—二〇二頁(香川雅信著)。
- 25 前掲小松和彦『妖怪学の基礎知識』、一九九頁。
- 26 山東京伝『這奇の見勢物語』、一八〇一年、都立中央図書館蔵。
- 27 高岡弘幸『幽霊—近世都市が生み出した化物』(吉川弘文館、二〇一六年)、一四二頁。
- 28 川添裕『江戸の見世物』(岩波書店、二〇〇〇年)、八四—八五頁。
- 29 中野三敏『見立絵本の系譜』『戯作研究』(中央公論社、一九八一年)。
- 30 山東京伝『百化帖準擬本草』、一七九八年、早稲田大学図書館蔵。
- 31 これらに続く「阿菊が皿の關たるもあり」から、『播州皿屋敷』(一七四一年初演、浄瑠璃)に有名な女幽霊のお菊の皿のことを指し、割ってしまつて数えることのできない十枚目の皿を黄表紙の丁数とかけた表現。
- 32 前掲アダム・カバット『江戸化物の研究—草双紙に描かれた創作化物の誕生と展開』他。「化物見立て」は、化物とは関係のない人物、物事を化物に置き換えて表現したものを指す。
- 33 前掲アダム・カバット『江戸化物の研究—草双紙に描かれた創作化物の誕生と展開』、一四四頁。
- 34 前掲アダム・カバット『江戸化物の研究—草双紙に描かれた創作化物の誕生と展開』、一七五頁。
- 35 勝丸裕哉『櫛簪とおしゃれ—粋に華やかに、麗しく』、一一頁。
- 36 『続未曾有記』(『近世紀行集成』、二〇七—二〇八頁)。
- 37 山東京伝『小紋雅話』、一七九七年。
- 38 喜多川守貞『守貞謾稿』、一八三七年起稿。(宇佐美英機校訂『近世風俗史』(四)、二一八—二一九頁)。
- 39 「獅子身中の虫」・「平気蟹」・「人面の鯨」・「溝から蛇」・「爪の火」・「うその皮」の六種。
- 40 「温鈍げの花」・「金のなる木」・「奴のひぼし」・「蜜人とりのみいら」・「山の神の角」は生物として説明が付されない。また、動くこともできないと思われる。
- 41 横井也右作大田南畝編『鶉衣』、一七八七—一七八八年。(石田元季校訂『鶉衣』(上下)、岩波文庫、一九三七年)。
- 42 前掲アダム・カバット『江戸化物の研究—草双紙に描かれた創作化物の誕生と展開』、一五三頁。